

生死の境界と「自然・天気・季節」の語り ——「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示

西條剛央 Takeo Saijo
早稲田大学 Waseda University

要約

やまだ (2001) は、芸術作品やインタビューの語りをテキストとして用い、死に直面した人が天気へ言及する可能性を検討し、3つの仮説を提出した。本研究の第一の目的は、それらの仮説を継承し考察を深化させることであった。(A) 新視点の導入：語り手の視点に立ち、天気に言及した当人はどのような心理状態で、何をどのように感じ取ったために、天気に言及したかを分析することとした。(B) 10 テキストを用いて、先行仮説を検討した結果、次の3つの修正仮説が提出された。仮説①「親しい他者や自己の死に直面した際、『うつくしい・あかるい・晴れやかな』生のエネルギーを感じさせる『自然・天気・季節』の語りが現れることがある」。仮説②「親しい他者や自己の死に直面した時、感受性が高まり、死とは対照的な『自然現象のうつくしさ・あかるさ・晴れやかさ』を敏感に感じ取り、『自然・天気・季節』に関連づけてそれらに言及されることがある」。仮説③「語り手の視点に立ちつつ、生死の境界における語りの組織的分析を行うことは、日常生活の心理学的現実を生きたかたちで探究する方法として有効である」。(C) 先行研究 (やまだ, 2001) の4つのテキストを用いて、それらの修正仮説の妥当性を確認し、(D) 修正仮説をまとめ、(E) 今後の研究の方向性を示唆した。最後に、本研究の論理構造 (上記の (A) ~ (E)) 自体を仮説継承型ライフストーリー研究の一つのモデルとして提案した。

キーワード ライフストーリー、語り、死と天気、質的アプローチ、仮説継承型研究

Title

The narrative of nature, weather, and season in face of death: a model of the life story research to succeed previous hypotheses.

Abstract

The present study reexamined the hypothesis which had been established by Yamada (2001), and modified it by analyzing 14 texts. The hypothesis was modified as follows: Those who face the death of significant others or themselves tend to mention the beautiful and bright nature because they become sensitive to it in the point that it is contrasted with the death. Additionally, this study proposed a new framework named "hypothesis-succeeding" which can not only test previous hypotheses but also develop them, instead of using the conventional "hypothesis-testing" framework. It was suggested that the logical structure of this paper could be a model of life story research to succeed previous hypotheses.

Key words

life story, narrative, death and weather, qualitative approach, hypothesis-succeeding

問題・目的

人生の物語（ライフストーリー）研究とは、日常生活で人々がライフ（人生、生活、生）を生きていく過程、その経験プロセスを物語る行為と、語られた物語についての研究を指す（やまだ、2000）。普通の人々が日常生活で普通にやっていることを知る際には、この物語モードによる心理学研究が有効である（やまだ、2000）。語りアプローチでは、フィクションか事実か、芸術的か科学的かを区別せず、文学、新聞、電子メールといった（広義の）言語で語られたものはすべて「テキスト」と呼び、共通の地平に立つ点が、従来の心理学が依拠するパラダイムと大きく異なる（やまだ、2000, 2001a）。

やまだ（2000）は、ライフストーリー研究は、モデル構成によって一般化を目指す方法論（山田、1986；やまだ、1997）に基づくべきだと主張した⁽¹⁾。そして、実際その方法論に基づき、芸術作品やインタビューの語りをテキストとして用いて、生死を分ける極限の時に発せられる天気への言及には、ある種の普遍的な心理的リアリティがある可能性を検討し、以下の3つの仮説を生成した（やまだ、2001a）。①他者の死を見送る時、自己が死ぬ時にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で天気の語りが現れるのは、偶然ではなさそうである。②その語りは、日常と非日常、連続性と非連続性、人間と自然、生者と死者、自己と他者など、多重の関係性の亀裂を意味するだろう。③生死の境界の語りの組織的分析は、日常生活の心理学的現実を生きたかたちで探究する方法として有効だろう。本研究では、この3つの仮説を検証し、考察を深めることを第一の目的とする。

ところで、近年我が国では質的研究の意義が認められ、方法論も整備されつつある（やまだ、2001b）。最近では、方法論整備の一環として、様々なタイプの質的研究モデルが見本帳（やまだ、サトウ、南、2001）としてまとめられた。しかし、知見の積み上げのための、論証方法やその整備のための具体的提案はあまり為されていないのが現状であろう⁽²⁾。従来の心理学は、知見の積み上げに際し「検証」という枠組みに依拠してきた（Gergen, 1994/1998）。そして、

数値化と統計的手法、特に有意検定がほとんど唯一の仮説検証のための道具である（尾見、1996）といわれるほど、「検証」と「検定」とは切り離せない関係となっている。また検証とは客観主義を背景とし、要素還元を基本的手段とする（菅村、2001）ことから、基本的に対象とした仮説の範囲内で、検定を用い、より細分化した方向へと還元を繰り返し、客観的実在への到達を目指す枠組みといえる。このため、仮説検証においては、往々にして多標本が必要となるとともに、研究者独自の視点を積極的に導入しつつ検討し、先行研究の仮説自体を柔軟かつ大幅に修正・変更・追加することは是とされない。つまり、仮説検証という枠組み自体、発展性という意味では極めて貧弱かつ閉鎖的なものであり、特に社会構築主義に代表されるようなポストモダニズムの認識論とする質的アプローチに適合する枠組みではないのである。今後さらに、質的心理学が心理学の新しいあり方として定着・発展していくためには、知見積み上げの論証法について合意かつ妥当な方法を整備・提案していく必要がある（佐藤、1996）。その際には研究対象とする現象に応じて、仮説をより細分化・精緻化していく従来の検証の方向性と、記述や解釈の多様性を拡大する発展的方向性の、双方を柔軟に追求可能な枠組みであることが理想である。したがって、このような具体的提案の一つとして、「検証」に代わり、「継承」⁽³⁾という枠組みを提案する。以上を踏まえ、本研究の論理構造自体を、仮説考察循環の中に位置づけた「仮説継承型ライフストーリー研究」の一つのモデルとして提示することを本研究の第二の目的とする。

方法

テキスト

分析1では、先行研究（やまだ、2001a）で使用されていない（a）山頭火の日記・俳句（事例1-1・1-2）、（b）山田詠美の小説（事例1-3・1-4）、（c）宮沢賢治の詩・短歌（事例1-5～1-7）、（d）手塚治虫の漫画（事例1-8）、（e）中原中也の詩（事例1-

9・1-10) の計 10 のテキストを用いる。

分析 2 では、先行研究 (やまだ, 2001a) で用いられた、(a) 小津安二郎監督の映画 (事例 2-1)、(b) ヒーローを亡くしたファンの語り (事例 2-2)、(c) 死にゆくものの語り (事例 2-3)、(d) 中原中也の詩 (事例 2-4) の 4 つのテキストを用いる⁽⁴⁾。

以上のように、本研究ではインタビューデータから日記・短歌・俳句・詩・小説・映画・漫画に到る広範なジャンルの計 14 のテキストを使用する。

(A) 新たな分析視点の導入

やまだ (2001a) は、各事例を検討し生と死の境界で天気について語られる可能性を示し (仮説①)、そのことが何を意味するのか考察した (仮説②)。そこでのテキストの読みとり方はテキストに入り込むことなく、概して外部から評価するものといえよう。例えば中原中也の「死別の翌朝」という短詩に対しては、“事例 1-4 の短詩にも、突然の転調のように「良い天気」がでてくる。そして、この転調には不思議な心理的リアリティがある。事例 1-1 の東京物語のセリフと同様に、何気なく、しかも悲しみも涙もなく、一見妙に明るい「天気」に転調されることで、かえって現実の重さ、深い喪失感が読みとれる (やまだ, 2001a)” と述べている。このように、生死の境界における天気へ言及が、そのテキストにおいて、どんな効果を発揮しており、そこから何が読みとれるのか、それは何を表しているのかといったテキスト外部の視点から考察されていることがわかる。しかし、この方法では、なぜ読み手が「現実の重さ」や「深い喪失感」を読みとれるのかといった、読み手が感じる「不思議な心理的リアリティ」の正体に十分迫ることはできないように思われる。「語り」の原点に立ち戻ってみると、そもそも最も原始的な語りとは劇形式であり、そして聴衆が語り手を取りかこむのは物語を聴いたり、鑑賞したりするためではなく、その劇に全身で参加するためなのである (青江, 1974)。つまり、語りの聞き手は、その語りに入り込むことによって、そこに登場する人物の心理的リアリティを実感・共有しているのである。したがって、研究者も一方では外部的視点を保ち、もう一方では語りの中に入り込むといった二

重性に身を置きつつ、徹底的に言語化・分析することにより、「不思議な心理的リアリティ」の正体を明らかにできるのではないだろうか。具体的に本研究では、天気に言及する当人は (1) どのような心理状況で、(2) 何を、(3) どのように感じ取ったために、そのような言及をしたのかを分析・考察することとする。なお、ここで視点を成り込ませ分析する語り手とは、日記・俳句・短歌・詩ではその作品の作者自体を指すが、小説・映画・漫画においては、セリフを発している登場人物を指す。

本研究では、以上のような新たな視点も加え、各事例を検討する。

結果・考察

(B) 分析 1: 新テキストの検討

はじめに、種田山頭火の事例を見てみよう。山頭火は定住と放浪を何度も繰り返し、好きな酒を飲み、詠い、歩き続けた俳人である (石, 1995)。山頭火は、晩年松山のある草庵を死に場所に選んだ。事例 1-1 は、その草庵で彼が亡くなる直前に書いた日記の一部である (種田, 1940/1995)。

事例 1-1: 死の準備をし始めた頃の語り

十月一日の日記「身のまはりを整理する。いつ死んでもよいやうに。——おちついて静かに読書する。いつのまにやら風邪をひいたらしく、咳が出て鼻水が落ちて困る」
十月二日「百舌鳥啼きしきり、どうやら晴れさうな。早起きしたれど、頭おもく、胸くるしく食欲すすまず、ぼんやりしている。むしろ私としては病症礼賛、物みな我れによからざるなしである」

(種田山頭火の日記 1940年)

山頭火はこの 9 日後、念願だった「ころり往生」で、その人生の幕を閉じた (石, 1995)。十月一日の日記から、身体の不調が兆しており、また本格的に死の準

備を始めている様子が伺える（点下線部）。その次の日の日記に、「百舌鳥啼きしきり、どうやら晴れさうな」と天気と言及している（二重下線部）のは、やまだ（2001a）の仮説①を踏まえれば、偶然ではなさそうである。また先行研究において、天気といっても、悪天候やさみしい天候ではなく、「夏の暑さ」・「良い天気」という生のエネルギーを強く感じさせる天気が対比されている点が、各事例に共通していたと指摘されている（やまだ、2001a）のと同様に、ここでも「晴れ」という生のエネルギーを感じさせる天気と言及されている。また「身のまわりを整理する、いつ死んでもよいやうに」（点下線部）や、体調の悪化に対して「むしろ私としては病症礼賛、物みな我れによからざるなしである」（下線部）と述べていることから、山頭火は死を受容した静かな心境にあるようである。そんな山頭火には百舌鳥がしきりに啼く様子が聞こえてきて、「晴れそうだ」と言及したのだろう。なお、ここでの特徴は、「聴く」ことにより、天気と言及している点にある。

このような自らの生死の境界と「聴く」という行為の関連性は、山頭火の生前の俳句にもみられる。なお、言うまでもなく通常の俳句であればその形式上必ず季語を用いる。故に、通常の俳句で天気に触れられたとしても、それは俳句の形式自体による可能性があるため、本研究で扱う仮説の検討には適していないかもしれない。しかし、山頭火の俳句は形式としては自由律俳句に位置するものであり、特に山頭火は、季語を無視し、定型を壊し、伝統に反逆した（石、1995）。したがって、彼の俳句を本研究の検討材料として用いても問題ないと思われる。次の俳句は、事例1-1の10年ほど前に詠まれたものである。その時に書かれた日記とともに示す（石、1995）。

事例1-2：自殺を試みた際の俳句と日記

死にそこなって虫を聴いている

死のうと思ったが死ねない。死を意識して、死に対して用意するときほど、冷静に自己を観照することはない。

しみじみ、自分の命を知ってみて、虫の声をいま

聴いている。虫の音が、しずかにひびいてくる。
(略)

(種田山頭火の俳句と日記 1930年)

生と死の境界に直面した際に、虫の鳴き声に言及されている。山頭火は、「死を意識して、死に対して用意するときほど、冷静に自己を観照することはない」、「しみじみ、自分の命を知ってみて、虫の声をいま聴いている」（点下線部）と述べていることから、死を意識することによって、自らの命に触れ、周囲に対する感受性が最大限まで高まっている様子が伺える。その山頭火には、「虫の声」がしずかにひびいて来たのだろう（下線部）。このように、生と死の境界における言及は、必ずしも「天気」に限定されるわけではないのかもしれない。またここでの虫の鳴き声が、決してうるさく聞こえてきているのではなく、「しずかに」ひびいてきていることも何らかの意味を持っているかもしれない。

事例1-3は、山田詠美の小説「僕は勉強ができない」の一部である。主人公の秀美は高校生の男の子である。ある朝、秀美は急に発熱し学校を休んだ。その日の夕方、田嶋という友達が突然秀美を訪ねてきて、片山という仲の良かった友達が、その日の朝に自殺したことを告げた場面である。この事例では、主人公の秀美ではなく、田嶋に注目してみよう。

事例1-3：友人の自殺を知った直後の語り

ぼくには、まだ、田嶋の言っていることが、把握できずにいた。と、言うより、みぢかな人間が自ら命を絶つという事実が、どうしても実感として湧いて来なかったのだ。

「ショックだろ」

「……」

「解るよ。わりと、おれとおまえ、あいつと仲良かったもんな」

(略)

死んだからと言って、衝撃で、泣き叫ぶような関係ではなかった。けれど、ぼくたち三人は、色々なことを話し合ったものだ。ほとんどが軽い冗談に属する話題だったが、だからこそ、不謹慎にも、彼の死を心の中で描写してしまったりするのだ。こんな

時、変に冷静なぼくたちは、情の薄い人間たちなのだろうか。けれども、片山の生活には関わっていなかったのだ。失った苦しみに涙するなんてこと、出来る訳がない。

「梅が咲きそうだなあ」

田嶋が、ぼつりと言った。

(小説『僕は勉強ができない』山田詠美 1993年)

田嶋は秀美に友達の自殺を伝えた後、突然の転調のように「咲きそうな梅」に言及している(下線部)。事例1-2の「虫の声」やこの事例の「梅」をも包括する仮説としては、生と死の境界では「天気や周囲の自然」に対して言及されるといった方が適切のようだ。また点下線部にあるように、田嶋は「ショックだろ」と秀美に同意を求め、秀美が茫然と答えられないでいる様子を見て「解るよ」と言っていることから、梅に言及した田嶋自身がショックを受けていることがわかる。そんな心境の中、実際に梅が咲きそうな様子が、ふと眼に入ってきたのだろう。ここから友達の自殺にショックを受け、茫然としつつも、周囲の自然に対する感受性が高まっている様子が伺える。またここでもやはり、「散りそうな桜」ではなく、「咲きそうな梅」といった生のエネルギーを感じさせる自然現象に言及されていることにも注意する必要がある。そして、この事例は事例1-1・1-2と異なり、自分の死ではなく、親しかった友達の死(自殺)に直面していることにその特徴がある。したがって、新たに考察されうることは、極めて親密な関係でなくとも、その人が死んだことにショックを受ける程度の親しい関係であれば、このような「天気や周囲の自然」に対する言及は起こりうるということである。

秀美はこの翌日になると熱はさらに上がり、眠り続けたが、その翌日にはすっかり回復した。そして、その日普段通り登校している途中、秀美は、どうしたわけか、つい反対方向の電車に乗ってしまった。事例1-4は、その場面の一部である。

事例1-4：自殺した友達のことを思いだした際の語り

(思考)

景色は、次第に、のどかさを増して行った。隣の座席では、おばあちゃんが居眠りをしていた。車内は暖かかった。眠るのに、これ程気持ちの良い場所はないように思われた。ぼくは、ふと、片山のことを思い出した。

(略)

彼の自殺が、幸福だったのか、不幸だったのかを他人が言い当てることなど出来ない。

しかし、しかしだよ。こんなふうに、ぼんやりと電車に乗って、春が来たと思うのは、ささやかだけれど、やはり、楽しいことなんじゃないか? 微笑を口許に刻める瞬間ってのは、ささやかだけれど、やはり、必要なんじゃないのか? 他愛のない喜び、それが日々のひずみを埋めて行く場合もあると、ぼくは思うのだ。

(略)

片山は、ぼくたちを笑わせることだって出来たのだ。彼の唇は、そういう言葉を紡ぐことだって出来ていたのだ。もったいないじゃないか。春の空気は、こんなに気持ち良く、そして、その春は、毎年、裏切らずに巡って来るというのに。

「おにいさん、大丈夫かね」

眠っていた筈のおばあちゃんが、いつのまにか心配そうに、ぼくを覗き込んでいた。

「これで涙を拭いたらいいよ」

(小説『僕は勉強ができない』山田詠美 1993年)

ここでは自殺した友達のことを思い出した際に、「春」という季節について言及されている(下線部)。したがって、事例1-2の「虫の声」や事例1-3の「梅」、本事例の「春」を包括する仮説としては、生と死の境界では「天気・自然・季節」に対して言及されるといった方が適切のようだ。ここでも「春」という生のエネルギーを感じさせる季節に言及されている点は、事例1-1や1-3に共通している。そして、いつともなく涙が溢れてきていることから(点下線部)、秀美の情動は高まっている様子が伺える。このような死に向き合う中で、感性が高まっている様子は事例1-2、1-3にも共通していた。そんな秀美は、空気の「気持ちよさ」や「暖かさ」から、季節の変化を敏

感に感じ取り、「春」に言及したことがわかる。

事例1-5は、宮沢賢治が、1922年の妹トシ子の死に直面した際に書いた、「永訣の朝」という詩の冒頭である。賢治が死にゆくトシ子を見守っている場面である。なお、妹トシ子は賢治をして「信仰を一つにするたった一人のみちづれ」と言わしめた最愛の存在であり(佐藤, 1942)、トシ子の死は、賢治が生涯に味わった最も全存在にかかわる精神的危機でもあった(岡家, 1995)。

事例1-5：死にゆく妹を見守っている詩

けふのうちに
とほくへいってしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふっておもてはへんにあかるいのだ

(「永訣の朝」宮沢賢治 1922年)

ここでは最愛の妹の死に直面した場面で突然の転調のように、「天気」に言及されている(下線部)。この日「永訣の朝」を含め三編もの詩を書き、その後七カ月間も沈黙を守っていることから、妹トシ子の死に直面した賢治の感受性は極限まで高まったであろうと推測される。福島(1985)は、この日に書かれた一連の詩から、この時の賢治を評し「……愛する者の死の日、詩人の精神の緊張は異様なまでに高揚し、はりつめ、死んでゆく者に対する配慮や、死んでゆく者を見送るおのれの心の光景を凝視する力はすさまじい。……」と述べている。そうした賢治の眼には、みぞれがふっているにもかかわらず、外がうすあかるい様子が写ったのであろう。死に直面することによって感受性が高まった結果、天気や周囲の自然に言及されている様子は、これまでの各事例と共通していた。晴れている時と単純に比較すれば暗いといえるはずなのだが、これまでの事例で、生のエネルギーを感じさせる天気(自然)に言及されていることを踏まえると、明るい部分に意識が向き言及されていることは興味深い。

事例1-6は、1932年に、賢治が重病時に自宅で書いた「眼にて云う」という詩である。

事例1-6：重病の中自らの死を覚悟している詩

だめでせう
とまりませんな
がぶがぶ湧いているですからな
ゆうべからねむらず血も出つづけるものですから
そこらは青くしんしんとして
どうもまもなく死にさうです
けれどもなんといい風でせう
もう清明が近いので
あんなに青ぞらからもりあがって湧くように
きれいな風が来るですな

(略)

あなたの方から見たらずいぶんさんたんたるけしき
でせうが
わたくしから見えるのは
やっぱりきれいな青ぞらと
すきとほった風ばかりです

(「眼にて云う」宮沢賢治 1932年)

ここでも突然の転調(二重下線部)の後、青空や風といった天気や周囲の自然に言及されている(下線部)。「どうもまもなく死にさうです けれどもなんといい風でせう」や、「あなたの方から見たらずいぶんさんたんたるけしきでせうが わたくしから見えるのは やっぱりきれいな青ぞらと すきとほった風ばかりです」(太字)とあることから、身体的には危機的な状況にある己を客観的に捉えつつも、精神的にはむしろ落ち着いており、周囲の自然に対する感受性は高まっている様子が伺える。また、このように自らの死を意識しているにもかかわらず、下線部にあるように、賢治の眼に入る「青ぞら」や「風」は、きれいで、こち良いものに写っていることは興味深い。なお、詩人は元々通常の人よりも感受性は強く、詩の中で自然や天気、季節等に頻繁に言及しているのではといった指摘もあろう。しかし、詩人は、いつでも詩を書いているわけではなく、詩を書くという行為自体、何らかの出来事や光景に喚起され、特に感受性が高まった時に行われる。したがって、生死の境界において、詩人が詩を書き、その中で天気へ言及がみられること自体に既に意味があるといえるだろう。

事例 1-6 で賢治は死を覚悟しているものの、その後友人でもあり友でもある佐藤隆房により適切な処置を受け回復している（佐藤，1942）。次の事例 1-7 は、1933 年、賢治がはっきりと「もうお迎えがくる」ことがわかった後に書き（青江，1974）、実際に絶筆となった短歌二首である。

事例 1-7：賢治が自らの死を悟った後に書き、絶筆となった短歌二首

方十里稗貫のみかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる

病の故にもくちんいのちなりみのりに棄てばうれし
からまし

（短歌 宮沢賢治 1933 年）

本研究の文脈上、この短歌で重要なことは、死の直前で書かれた詩に「そらはれわたる」（下線部）と「天気（自然）」に言及されている点にある。はっきりと死を覚悟した賢治の眼には「はれわたったそら」が写ったのである。

このような自らの死の直前における天気（自然）への言及は、手塚治虫の作品の中でもみられる。事例 1-8 は、「火の鳥：乱世編上」（手塚，1978～1980／1992b）において描かれている、ある老人が死にゆく場面である。彼は若い頃、我王と名乗り、人殺しや強盗をしていたが、仏に仕える師匠との出会い等を契機に、優れた仏像等を造るようになった。その後、政権争いに巻き込まれ両腕を失い、鞍馬の山の奥に住み着いた（手塚，1969～1970／1992a）。そこで戦災孤児等の世話をし、天狗と呼ばれ子ども達に慕われていた。ある日もうすぐ死ぬことを悟った我王は、彼を慕う者達に、自分を山頂に運ぶように頼んだ。

天狗はこの直後、「おう……鳳凰がむかえにきてくれたよの……」という言葉で最後に息を引き取る。ここでも、自分が死ぬ直前で美しく輝いている夕日に言及されていることから、自然（天気）に言及されているといえる。また、「見るがよい……あの夕日

を……」との天狗の言葉に従い、周囲の子ども等も夕日を見ている。死にゆく者と彼を見送る者達の眼には、ここで描かれている山際に沈んでいく夕日の美しい情景が映ったであろうことから、彼等の自然に対する感受性の高まりが感じられる。

次の事例 1-9 は、1936 年に、中原中也が溺愛していた二歳になる一人息子が亡くなった後に書いた詩である（分銅，1974）。なお、この詩は息子が亡くなったから一カ月以内に書かれたことはわかっているが、その詳しい日時は不明である。

事例 1-9：子を亡くした親の悲しみを詠った時

また来ん春と人は云う
しかし私は辛いのだ
春が来たつて何になる
あの子が返つて来るぢやない

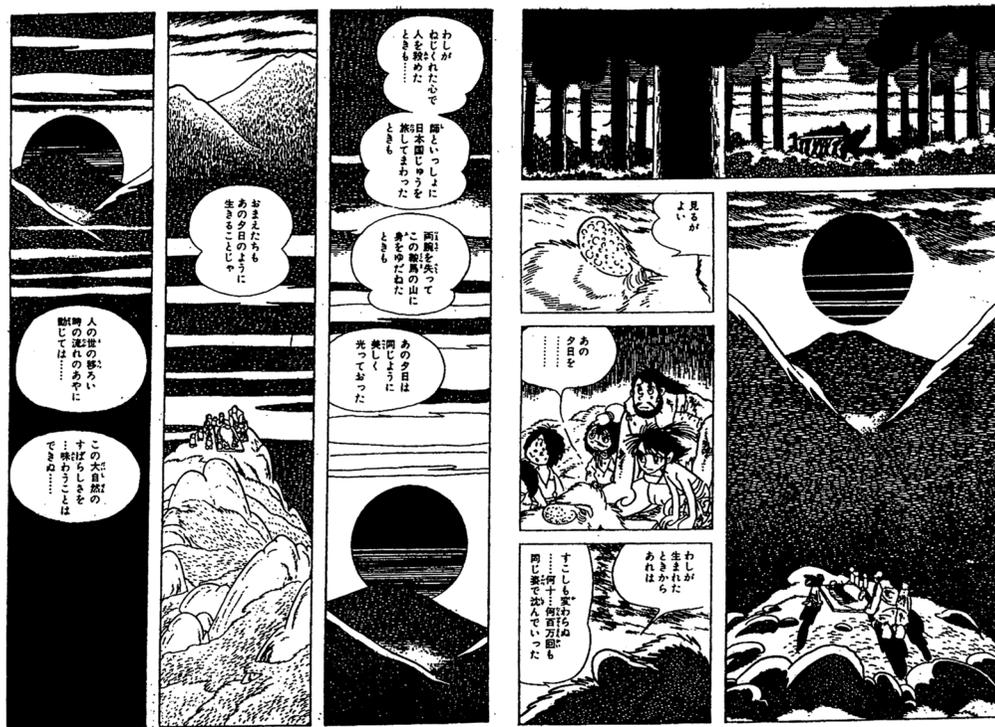
おもへば今年の五月には
おまへを抱いて動物園
象を見せても猫（にゃあ）といい
鳥を見せても猫（にゃあ）だった

最後にみせた鹿だけは
角によつぽど惹かれてか
何とも云わず 眺めてた

ほんにおまへもあの時は
此の世の光のただ中に
立つて眺めていたつげが……

（「また来ん春……」亡児の追悼詩
中原中也 1936 年）

事例 1-9 では、中也は実際に眼に映ったものではなく、亡児の生前のイメージを思い浮かべ、子を亡くした親の深い悲しみを詠っている。ここでも、やはり冬や闇ではなく、生命の息吹を感じさせる春や、明るい日の光といった生のエネルギーを感じさせる季節や天気と言及されている（下線部）。最初の段落では「春」という季節と、亡児が対比されており、最終段落では、亡児が日の光の中に立っている生前の姿が描写されている。第一段落から、亡くなった我が子を想



©手塚プロダクション

事例 1-8 死にゆく語り (漫画「火の鳥：乱世編 上」手塚治虫 1985年)

う中へには、「また春が来る」という言葉は、全く癒しになることはなく、むしろ我が子は二度と戻らないという事実が確認され、その苦しみは大きくなっていることがわかる。そんな悲しみにくれる中へには、日の光の中にいる生前の生き生きとした我が子の姿が目に見え、浮かんで来たのだろう。中へはこの直後の正月には、悲嘆のあまり精神に異常をきたし精神病院に入院した(分銅, 1974)。このことから、この詩を書いた中への精神は、極限の状態にあることが推測される。その後完全に回復することはなく、その年の10月、中へは静かに息を引き取った(分銅, 1974)。

またこのような季節と死の対比は、中への他の詩にもみられる。事例1-10は、1931年9月26日に亡くなった弟の死を想い詠われた詩の冒頭である(分銅,

1974)。なお、中原家の長男であるにもかかわらず、家業を継がず、詩人として放埒な生活を送っていた中へは、自分に代わり、医学を志した捨三に対して、深い愛情とともに強い自責の念を感じていた(分銅, 1974)。

事例 1-10: 亡くなった弟を想う詩

毎日毎日雨が降ります
 去年の今頃梅の実を持って遊んだ弟は
 去年の秋に亡くなって
 今年の梅雨にはいませんのです

(「梅雨と弟」中原中へ 1932年)

この詩では、亡くなった弟を想う中で、天気(下線

部)や季節(点下線部)に言及されている。毎日降る雨を見て、一年前の梅雨には、梅の実を持って遊んでいた生前の弟の生き生きとした姿が思い浮かんだのだろう。毎年繰り返される季節を見ることで、弟の命は、再生され得ないという事実を確認させられているようにも思われる。なお、この事例は弟の死後半年以上経過した後にかかれたものであり、生死の「ぎりぎりの境界」における語りではないことを記しておく。

分析1のまとめ—修正仮説の提起

分析1では、やまだ(2001a)の挙げた仮説を検討するために、天気と言及する当人が(1)どのような心理状況で、(2)何を、(3)どのように感じ取ったために、そういった言及がされたのかといった新たな視点を加えつつ、新テキストを用い検討してきた。

やまだ(2001a)の仮説①「他者の死を見送る時、自己が死ぬ時にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で天気の話が現れるのは、偶然ではなさそうである」は、事例1-1・1-5・1-6・1-7・1-10から本研究でも確認されたといえる。したがって、仮説①の後半部を「…天気の話が現れることがある」と修正することとする。また、天気のみならず自然や季節にも言及されており、かつそれらは「うつくしく、あかるく、晴れやかな」生のエネルギーを感じさせるものであったことから、「他者の死を見送る時、自己が死ぬ時にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で、『うつくしい・あかるい・晴れやかな』生のエネルギーを感じさせる『自然・天気・季節』の語りが見ることがある」と修正した方が良さだろう。またこの際の「他者」とは、全事例を通じて、少なくともその人の死によりショックを受ける程度には親しい関係であったことから、修正仮説①「親しい他者や自己の死に直面した際、『うつくしい・あかるい・晴れやかな』生のエネルギーを感じさせる『自然・天気・季節』の語りが見ることがある」となった。

次に、仮説②(やまだ, 2001a)の「その語りは、日常と非日常、連続性と非連続性、人間と自然、生者と死者、自己と他者など、多重の関係性の亀裂を意味するだろう」について考察を進める。この仮説は本研

究において、どの事例にも部分的には適合していたことから基本的に支持されたといえる。しかし、仮説②の「多重の関係性の亀裂を意味する」という記述は、やや具体性に欠け、「継承」の枠組みの検証的側面には適していないように思われた。モデルは検証可能な側面を持ったかたちで提起される必要がある。つまり、いかようにも適用可能ではあるが、積極的に肯定も否定もできないモデルではなく、限定された領域で、限定された目的に対し、限定された用語で構成される検証可能なモデルこそ、今後の研究に有効である(山田, 1986; やまだ, 1997)。したがって、本研究ではさらに考察を進め、天気への言及の背後にある構造の仮説化を試みる。

やまだ(2001a)は、各事例に、生のエネルギーを強く感じさせる天気が対比されていることを指摘し、その説明として、外部の晴れやかさ・明るさが、落ち込んでいる人々をより沈ませるという事実を指摘している。確かにそういったことはあると思われるが、これはむしろ二次的な現象なのではないだろうか。つまり、気持ちがより沈む等々の感情の変化は、外部の美しさ、晴れやかさ、明るさを語り手が能動的に感じ取るからこそ起こることのように思われる。その証拠として、事例1-1・1-6・1-7のように、生のエネルギーを強く感じさせる天気を感じることで、特に気持ちが沈んでいるとは思われない事例も見られる。したがって、明らかにすべき問題は、死に直面した時、我々がなぜ外部のうつくしさ、あかるさ、晴れやかさを感じ取るのかといったことであろう。他者の死を見送る時、自己が死ぬ時にかかわらず、生死のぎりぎりの境界では、感受性が高まっている様子がほぼ全事例に見られた。その高い感受性によって、周囲にある、死とは対照的な、再生を繰り返し継続する美しい自然現象のうつくしさ、あかるさ、晴れやかさを感じ取り「天気・自然・季節」に関連づけてそれらに言及されることがあるのだろう。以上のことから、語り手が生死のぎりぎりの境界で「天気・自然・季節」に言及する構造を説明するモデルとして、修正仮説②「親しい他者や自己の死に直面した時、感受性が高まり、死とは対照的な『自然現象のうつくしさ・あかるさ・晴れやかさ』を敏感に感じ取り、『天気・自然・季節』に関連づけてそれらに言及されることがある」が提起

された。

次に、冒頭で挙げた“生と死のぎりぎりの境界において突然「天気」に言及されることによって、なぜ読み手が「現実の重さ」や「深い喪失感」を感じ取れるのか”といった問題について考察を進めよう。修正仮説②で、生死のぎりぎりの境界では、死とは対照的な再生を繰り返し永続する自然現象に対する感受性が高まり、その「うつくしさ・あかるさ・晴れやかさ」が感じられていることが示された。まさにこれこそが、我々が感じ取る「不思議な心理的リアリティ」の正体ではないだろうか。実際に我々が生死の極限の境界に直面した際、感受性が高まり、周囲のうつくしい、あかるい、晴れやかな天気（自然・季節）が眼に入ってくる経験をしたことがあるからこそ、我々は生死の極限の境界における突然の天気（自然・季節）への転調に、「現実の重さ」や「深い喪失感」を読みとるのだと思われる。なお、これによって「詩人のことばの選択は的確な心理的リアリティに裏打ちされている」というやまだ（2001a）の主張が、語られない行間を具体的な証拠に基づいて徹底的に言語化していく作業（やまだ、2001a）により、より説得的に示されたといえる。また詩人に限らず、人々に感動を与える優れた小説家・俳人・映画の創り手・漫画家等にも同様のことが当てはまるといえる。

以上のことから、日常生活の心理学的現実をより生きたかたちで探究する上で、一方では外部的視点を保ち、もう一方では語りの中に入り込むといった二重性に身を置きつつ、テキストを読み解く有効性が示された。また、これはとりもなおさず「生死の境界における語りの組織的分析が日常生活の心理学的現実を生きたかたちで探究する方法として有効である」という仮説③（やまだ、2001a）を支持することを意味する。これらを統合した修正仮説④は「語り手の視点に立ちつつ、生死の境界における語りの組織的分析を行うことは、日常生活の心理学的現実を生きたかたちで探究する方法として有効である」となる。

以上から、先行研究によって生成された仮説①～③（やまだ、2001a）は筆者によって検討され、基本的に支持されたことから、ある程度の客観性を得たといえる。なお、ここでいう客観性の獲得とは必ずしも仮

説のすべてが一致することを意味するものではない。なぜなら、質的アプローチにおける、個人の解釈の正は、他の研究者によって行われた様々な解釈と比較検討され、その共通性と相違性を明らかにされることによって為されるからである。

(C) 分析2—修正仮説の妥当性の検証

次に、先行テキスト（やまだ、2001a）を用い、提起された修正仮説の妥当性を検討する。

以下の事例2-1の直前の場面は、突然母親を亡くして喪中の家族が集まっている中へ、三男の敬三が到着したところである。そのとき老父がいつのまにか居なくなったことに気付いた次男の嫁（原節子さん）が探しにいくと、長年連れ添った老妻を亡くした義父（笠智衆さん）は、一人で尾道の海を茫然と眺めながらたたずんでいた。以下は、その場面でみられた語りである。

事例2-1：妻を亡くした夫の語り

紀子	お父さまー
周吉	ああ…
紀子	敬三さんがお見えになりました。
周吉	そうか…
周吉	<u>ああ、…きれいな夜明けだったア。</u> ああ…今日も暑うなるぞ…。

（小津安二郎監督 映画「東京物語」1953年）

やまだ（2001a）が指摘するように「ああ…今日も暑うなるぞ…」（下線部）と、「天気」に言及している。さらに、語り手の視点に立ち検討すると、その直前の「ああ、…きれいな夜明けだったア…」というセリフ（二重下線部）が重要な意味を持つてくる。ここから、周吉は「夜明け」を見ていたことがわかる。筆者が映像から判断した限り、空や海（そしておそらくは島々）を全景とした夜明けをみていたと思われる（やまだ、2001a 参照）。その次にくる、先に挙げた「天気」に対する言及は、そのような夜明けを見て発せられたものであろう。また、そのセリフ（二重下線部）から、しみじみと夜明けのうつくしさを感じていたことがわかる。このことから周吉の感受性の高まり

が推測される。以上から、親しい他者の死に直面した際に高まった感受性により、自然現象のうつくしさ、あかるさを感じ取り、その自然や天気と言及されているといえることから、修正仮説は支持された。

次の事例 2-2 は、F1 レーサーで 1994 年に事故死したアイルトン・セナのファンの市田さん（仮名、女性、大学生、22 歳）がインタビューにおいて語ったものである。

事例 2-2：ヒーローをなくしたファンの語り

聞き手：(セナが亡くなった) 次の日はどうでしたか？

市田さん：ずっと祈ってて、気がついたら朝になって、少し眠ったのかなあ？ よくわかんないけど、声をあげて泣いている自分の声で目が覚めたの。もう泣いて泣いて布団かぶって泣いて。

でも、その日はどうしても学校いかなきゃならない日だったから、もう、しぶしぶ起きて部屋のドアを開けたら、めっちゃめっちゃ良いお天気なのね。何かすごく許せなくて。どうしてあんなにも偉大な人が亡くなったのにこんなに青空なの？ せめて、雨でも降ってれば少しは気持ちがおさまったかもしれない、台風だったらもっと良かった。下に降りていくと、お父さんとかお母さんとかお兄ちゃんとか普通でいるんだよね。いつもと変わらない朝。セナがいないのに、いつもの日常がそこにあって、お兄ちゃんだっけセナのファンのくせに、平気でご飯なんか食べてて……。もう、その姿がまた許せなくて、「何でご飯なんか食べてんのよ」って。もう何もかも恨めしくてしかたがなくなってきたの。

(略)

(F1 レーサー・セナが死んだ翌朝のこと。
ファンの女性の語り やまだ 2000)

自分にとってのかけがえのないヒーローが亡くなった時の語りにも、「天気」への言及が見られた（下線部）。また、点下線部に「ずっと祈ってて、気がついたら朝になって、少し眠ったのかなあ？ よくわかんないけど、声をあげて泣いている自分の声で目が覚めたの。もう泣いて泣いて布団かぶって泣いて」とあることから、自分にとってのかけがえのないヒーローの突然の死により、感情が高まっている様子が伺える。そんな悲嘆にくれる市田さんの目には「死」とは対照

的な、一面の青空（二重下線部）が飛び込んで来たのだろう。やはり、自分にとって重要な他者の死に直面した際に、周囲に対して過敏になっており、青空といった明るい、晴れやかな自然が眼に入ってきて、天気と言及していることから、修正仮説は支持されたといえる。

事例 2-3 は、アメリカ人のゴードンさん（男性、文筆家、33 歳）が直腸ガンとその全身転移のため亡くなる 10 日前に、往診医のハドラー医師に語ったものである（Kleinman, 1988/1996）。彼は、咳き込み、苦しみ、胸からはガラガラという音をさせ、ぜいぜいと喘ぎながら、かすかだのはっきりした声で、とぎれとぎれになりながらも語った。

事例 2-3：死にゆく語り

ゴードン ぼくは今、死に向かっているのですね？

ハドラー ええ、そうです。

ゴードン 家の庭を眺めると陽の光が見えます。来週も、たぶん明日も、こんなふうに明るくきれいに光り輝いているんでしょう。でも、ぼくはその一部ではなくなるんです。もうここにはなくなるんです。こんなことを言っ、自分が死にかけているのが本当なのだと認めるのは、どんな気持ちができるかわかりますか、想像できますか？

(略)

死にたくないのです。まだ三十三歳ですよ。まだ人生を全うしなくてはいけない。今終わるわけにはいかないんです。不公平ですよ。どうしてこのぼくが死ななくてはいけないのですか？ どうして今なんですか？ 先生には答えていただかなくてけっこうです。今ちょっとひどい気分なだけです。もうすぐ最期だと思つと、感傷的で、精神的に弱くなるんです。

(クライマン「病いの語り」1988 年)

ここでも陽光に言及されていることから（下線部）、天気や周囲の自然に言及されているといえる。点下線部に「もうすぐ最期だと思つと、感傷的で、精神的に弱くなるんです」とあることから、ゴードンはもうすぐ死を迎えるという事実と直面し、感傷的になってい

ることが読みとれる。そんなゴードンさんが「家の庭」を眺めている中で、「明るくきれいに輝いている陽の光」が眼に入ってきたことがわかる（二重下線部）。これから、周囲の自然現象へ感受性が高まっているといえるだろう。以上から、自らの死に直面したゴードンさんの周囲の自然に対する感受性が高まった結果、「明るくきれいに光り輝いている陽光」が眼に入り、それについて言及したと考えられる。したがって修正仮説は支持されたといえるだろう。

事例2-4は、中原中也が、1931年9月26日に弟の死の知らせを聞き、東京から郷里に駆けつけ、弟の死に顔を見た翌朝、書簡に書いたものである（やまだ、2000）⁽⁵⁾。

事例2-4：弟を亡くした翌朝の短詩

生きのこるものはづうづうしく
死にゆくものはその清純さを漂はせ
さて、今日はよいお天気です。

（「死別の翌朝」中原中也書簡
弟捨三の悼詩 1931年）

やまだ（2001a）が指摘するように、ここでも唐突に突然の転調のように「良い天気」がでてくる（下線部）。しかし、非常に短い詩であるこの事例からは、それが何を見たことにより、語られたかはわからない。したがって次に、事例2-4に加筆したものと思われる詩「死の翌日」を見てみよう。これは弟の死の13日後の10月9日付けで友人へ送られた書簡に書かれたものである（分銅、1974）。

事例2-5：愛する弟を亡くした際の詩

生きのこるものはづうづうしく、
死にゆくものはその清純さを漂はせ
物云いたげな瞳を床にさまよはずだけで、
親を離れ、兄弟を離れ、
最初から独りであつたもののやうに死んでいく。

さて、今日は良いお天気です。
街の片側は曇り、片側は日射しをうけて、あつた
かい

けぎやかにもわびしい秋の午前です。
空は昨日までの雨に拭はれて、すがすがしく、
それは海の方まで続いていることが分かります

その空をみながら、また街の中をみながら、
歩いてゆく私はもはや此の世のことを考へず
さりとて死んでいつたものとも考へてはいない
のです。
みたばかりの死に茫然として、
卑怯にも似た感情を抱いて私は歩いてたと告白
せねばなりません。

（「死の翌日」中原中也 1931年）

ここから中也には、街を照らす陽の光や、それによってできた陰、すがすがしい空が見えていることがわかる（下線部）。また、最終段落から、中也は弟の死を目の当たりにして、茫然としている「自己」を観照している様子が伺える（太字）。そんな中也には、日射しを受けている街並みや、すがすがしい空が眼に映ったのだろう。これから、茫然としつつも、周囲の自然に対する感受性の高まった中也には、周囲の街並みや、陽の光、それによってできた陰、すがすがしい空が眼に映り「良い天気」に言及したと思われる。したがって、修正仮説は支持されたといえる。

以上分析2から、先行テキスト（やまだ、2001a）の事例においても修正仮説①～③が示されたことから、その妥当性が確認されたといえる。なお、本研究では、テキストの共有が容易なライフストーリー研究の特徴を活かし、分析1によって修正仮説を提起し、分析2によってその仮説の妥当性を確認することができた。しかし、これは修正仮説の客観性が得られたことを意味するものではない。なぜなら個人的な解釈により提案された仮説が、他の研究者により確認されてはじめて客観性が獲得されるからである。

(D) 結論

本研究で提起された修正仮説を整理する。

仮説①：「親しい他者や自己の死に直面した際、『うつくしい・あかるい・晴れやかな』生のエ

エネルギーを感じさせる『自然・天気・季節』の語りが現れることがある」

仮説②：「親しい他者や自己の死に直面した時、感受性が高まり、死とは対照的な『自然現象のうつくしさ・あかるさ・晴れやかさ』を敏感に感じ取った結果、『天気・自然・季節』に関連づけてそれらに言及されることがある」

仮説③：「語り手の視点に立ちつつ、生死の境界における語りの組織的分析を行うことは、日常生活の心理学的現実を生きたかたちで探究する方法として有効である」

(E) 今後の検証方向性とその方法

本研究は、やまだ(2001a)の仮説に基づき新たな視点を導入し、テキストにより検討したものである。このように仮説と考察は循環的に深化する(やまだ, 2001a)。今後も新たな視点を加えたり、検討角度を変えつつ、新テキストや先行テキストを効果的に組み合わせ検討され続ける必要がある。その際の参考事項として、本研究を通じて湧き起こってきた新たな疑問を挙げておく。

(1) **自己と他者**：自らが死にゆく時と、他者の死に直面した場合、表面的には同じ様な発言がされていても、若干質が異なる可能性はないだろうか？

(2) **時間の経過**：他者の死の直前と直後、さらにより時間が経過した後ではその言及に変化は見られないだろうか？ そしてもし、それらが異なるとしたらどういった点だろうか？

(3) **比較文化**：やまだ(2001a)は、死と天気に関連づけた語りは、各文化に普遍的に見られそうだと指摘しているが、より広範な文化のテキストを扱うことにより、この点についても再検討していく必要がある。医学的には死亡した状態から生き返った人による臨死体験の報告は、あらゆる文化で普遍的に見られるが、臨死体験者が見る光景には、普遍的な部分と同時に、各文化に特徴的な部分もある(立花, 1994)。それと同様に、本研究が指摘した生死の境界における「天気・自然・季節」の語りにも、普遍的な部分のみ

ならず、各文化に特徴的な部分があるのではないだろうか。例えば、砂漠地域・北極といった天気が安定しており比較的变化しない地域・文化でも、やはり天気について言及されるだろうか？ また、季節の変化が明確な地域・文化ほど、季節への言及が現れやすいという可能性はないだろうか？ また、大都会と田舎では、言及される内容に違いは見られないだろうか？

なお、工藤(1996)によれば、最終稿をふくめ、生成過程のエネルギーをはらんだエクリチュール(書かれたもの・書く行為)のすべては平等に検討される必要がある。なぜなら、書く、書き直す行為が、完結に向けての直線的な行程とは限らず、また死ぬ直前の判断が決定的だという保証はないからである。これと同様に、本研究で提案された修正仮説が、先行研究(やまだ, 2001a)で提案された仮説よりも妥当である保証はないことに注意しなければならない。より後で為された研究において提出された仮説が先行する研究より優れているとは限らない。またそれらの仮説の評価や妥当性は、それを検討する人が依拠する理論や、検討する視点により異なってくるにも注意する必要がある。

以上の点に留意しつつ、次はこれらの仮説を基に、より多種類の「生死の境界と〇〇の語り」事例を分析することで、さらに深い考察へと進むことができるだろう。

次に本研究の第二の目的である、「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示を行う。知見を積み上げるためには、仮説生成の作業と、その検証作業の境界を明確にする必要がある(山田, 1986; やまだ, 1997)。そのことに留意した本研究の論理構造((A)～(E))を、仮説考察循環モデルの一部に位置づけ図示する(図1)。

先行研究(やまだ, 2001a)で生成された仮説に基づき、(A)新たな視点を加えた上で、分析1において、(B)新たなテキストを用いて検討し⁽⁶⁾、修正仮説を提起した。さらに分析2において、(C)先行研究のテキスト(やまだ, 2001a)を用い、その提起された修正仮説の妥当性を検証した。そして(D)提出された修正仮説をまとめ、(E)今後の方向性を示唆した。

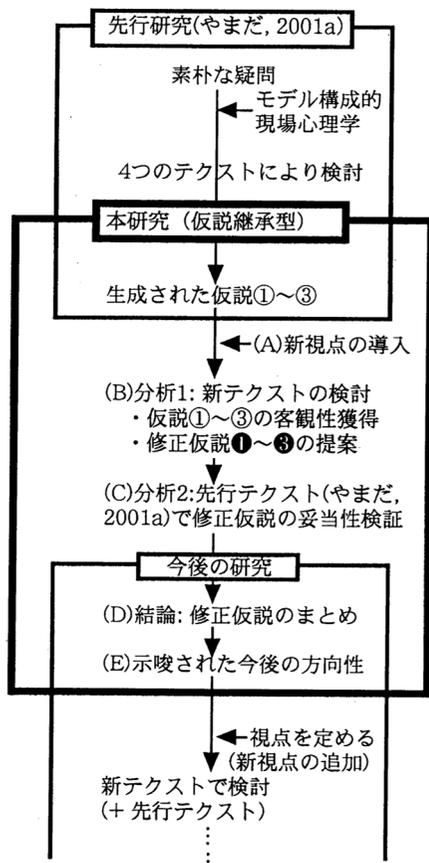


図1 仮説考察循環の中に位置づけた「仮説継承型ライフストーリー研究」モデル

仮説と考察が循環的に深化するためには、研究が積み重ねられる必要がある。「命には終わりあり、能には果てあるべからず」という世阿弥の言葉になぞらえて本稿を締めくりたい。

「命には終わりあり、学問には果てあるべからず」

注

- 1 ここでいう「一般化」とは、いわゆる「誰にとっても真である絶対的な知」を意味するものではない。物語論における一般化は、主体が限定されており、別の意味づけをする人々が存在することを含んでいる（やま

だ, 2000)。

- 2 これは、社会構築主義や構成主義を認識論とする質的心理学がその存在価値を仮説生成に求め過ぎ、結果として知見の積み上げを軽視している態度に見られることは無関係ではないだろう。またこのことが従来のパラダイムに依拠する研究者に不信感を抱かせ、質的心理学の浸透に歯止めを掛けている一因となっているようにも思われる。
- 3 初稿時は「仮説検証」としていたが、2001年7月7日にお茶の水女子大学で開かれた Self & Narrative 研究会にて本研究を発表させて頂いた際に、九州大学の遠藤利彦氏に、それは「検証」したというよりも、「継承」といった方が適切ではないかとの助言を受けたことを契機に「継承」といった概念を理論化すべく考え始めた。遠藤氏にはここに記して感謝したい。
- 4 このような先行研究で用いられたテキストを「先行テキスト」と呼ぶことを提案する。
- 5 2000年に京都で開かれた中原中也展で展示されていた一次資料に基づいている。
- 6 なお、物語の時間は、クロノジカルな時間とは異なり、順行するのみならず、逆行したり、循環したり、止まったりといった多様な時間軸を設定できる（やまだ, 2000）。本研究では、その特徴を活かし、本論の流れを最優先し、一部は逆行する時間軸により事例が並べられている。例えば、山頭火 [事例 1-1 (1940年) → 事例 1-2 (1930年)] や、中原中也 [事例 1-9 (1936年) → 事例 1-10 (1932年)] においては、事例を追って時間が遡るようになっている。

付 記

本稿を執筆するにあたり、寺田俊一郎・寺田和枝夫妻には有意義な助言を頂きました。心から感謝致します。

本論は、昨年の夏に他界した祖父に捧げたい。

文 献

青江舜二郎.(1974). 宮沢賢治：修羅に生きる. 東京：講談社.
 分銅惇作.(1974). 中原中也. 東京：講談社.
 Gargen, K.J. (1998). もう一つの社会心理学：社会行動学の転換に向けて(杉万俊夫, 矢守克也, 渥美公秀, 監訳). 京都：ナカニシヤ出版. (Gargen, K.J. (1994). *Toward transformation in social knowledge* (2nd edition). New York: Springer Publishing Company.)

- 福島 章. (1985). 宮沢賢治論：こころの軌跡. 東京：講談社.
- 石 寒太. (1995). 山頭家. 東京：文芸春秋.
- Kleinman, A. (1996). 病いの語り (江口重幸, 訳). 京都：ミネルヴァ書房. (Kleinman, A. (1988). *The illness narratives*. Oxford : Blackwell.)
- 小林康夫. (1996). エクリチュールと〈インターコース〉. 川本皓嗣・小林康夫 (編), 文学の方法 (pp.213-230). 東京：東京大学出版会.
- 工藤庸子. (1996). 草稿を読む. 川本皓嗣・小林康夫 (編), 文学の方法 (pp.193-212). 東京：東京大学出版会.
- 草野心平. (1969). 宮沢賢治詩集. 東京：新潮社.
- 中原中也. (1975). 中原中也詩集. 東京：思潮社.
- 中原中也. (1997). 中原中也：作家の自伝 54. 東京：日本図書センター.
- 岡家昭雄. (1995). 宮沢賢治論：賢治作品をどう読むか. 東京：おうふう.
- 尾見康博. (1996). 納得の基準：心理学者がしていること. 東京都立大学人文学部「人文学報」, **269**, 31-45.
- 佐藤隆房. (1942). 宮沢賢治：素顔の我が友. 東京：富山房.
- 佐藤達哉. (1996). わが国の心理学会における現場心理学のありかたを巡って. 発達心理学研究, **7**, 75-77.
- 菅村玄二. (2001). 人間科学のメタ理論. ヒューマンサイエンスリサーチ, **10**, 287-299.
- 立花 隆. (1994). 臨死体験 下. 東京：文芸春秋.
- 種田山頭火. (1995). 種田山頭火：作家の自伝 35. 東京：日本図書センター.
- 手塚治虫. (1992a). 火の鳥④：鳳凰編. 東京：角川書店. (初出は「COM」1969年8月号～1970年9月号に連載)
- 手塚治虫. (1992b). 火の鳥⑦：乱世編 上. 東京：角川書店 (初出は「COM」1978年4月号～1980年7月号に連載)
- 山田詠美. (1993). ぼくは勉強ができない. 東京：新潮社.
- 山田洋子. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, **25**, 31-51.
- やまだようこ. (1997). モデル構成をめざす現場心理学の方法. やまだようこ (編), 現場心理学の発想 (pp.161-186). 東京：新曜社.
- やまだようこ (編). (2000). 人生を物語る：生成のライフストーリー. 京都：ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2001a). いのちと人生の物語：生死の境界と天気の語り. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), カタログ現場心理学：表現の冒険 (pp.4-11). 東京：金子書房.
- やまだようこ. (2001b). はじめに. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), カタログ現場心理学：表現の冒険 (pp. i-iii). 東京：金子書房.
- やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編). (2001). カタログ現場心理学：表現の冒険. 東京：金子書房. (2001.6.5 受稿, 2001.9.27 受理)